

2023年度（2024年3月）卒業アンケート結果について

2025年3月30日

このアンケートは、2024年3月卒業生183名の85.7%にあたる157名の回答を分析したものである。回答者の専修言語の内訳を見ると、現代英語学科が最も多く、全体の50%（約79名）を占めている。次いで多かったのは国際コミュニケーション学科の韓国語専修で、25%（約39名）となっている。その他の専修言語の割合は、日本語専修が10%（約16名）、ドイツ語専修とフランス語専修がそれぞれ5%（各約8名）、中国語専修が4%（約6名）であった。

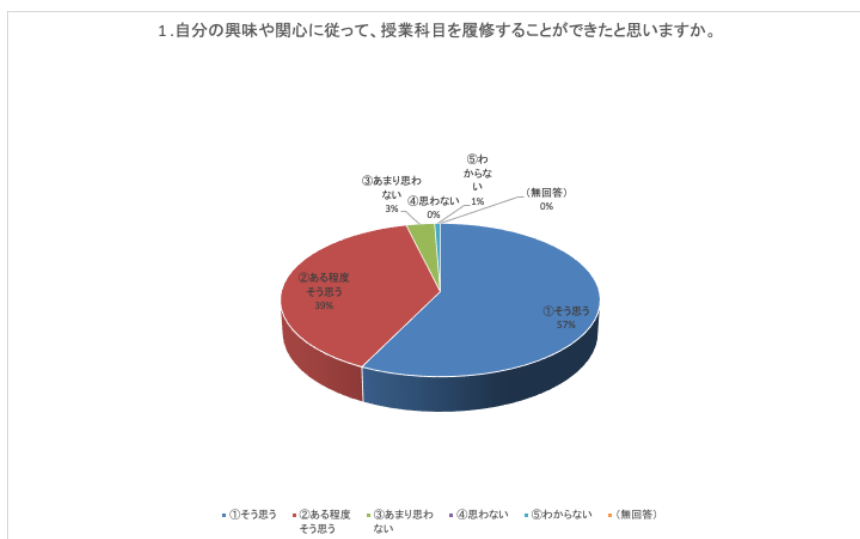
以下、6つのカテゴリーごとに分析を付す。回答結果についてはセクションごとにグラフを掲載する。

I. 語学力・教養・主体性に関する学生の自己評価

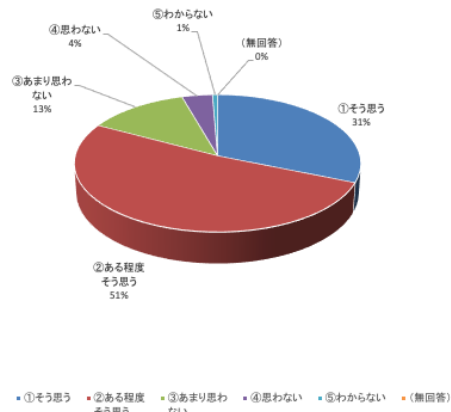
多くの学生が大学における学びに対して肯定的な評価を持っていることが明らかとなった。特に、「自分の興味や関心に従って授業科目を履修できた」とする回答が96%に上る点は、カリキュラムの柔軟性や多様性が学生のニーズに答えていることを示している。また、主体的に学ぶ力が身についたと感じている学生も95%と高く、学習意欲の醸成において一定の成果が得られていると評価できる。

一方で、語学学習に関しては肯定的な回答がやや低めの82%にとどまっており、他の項目に比べて満足度に差があることがうかがえる。語学力の定着には個人差が大きく、学習支援や動機づけの在り方について、さらなる工夫が求められる。

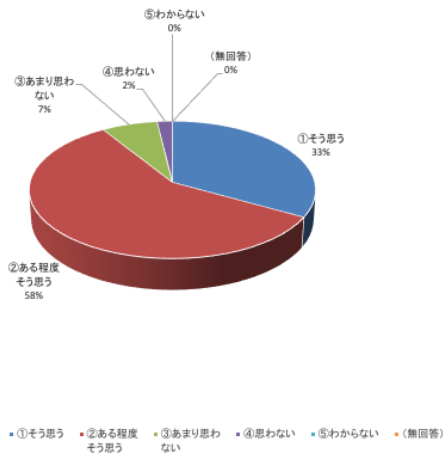
全体として、学生は大学生活を通じて、専門知識や教養、主体的な学びの姿勢など、将来社会で求められる基礎的な力を着実に身につけていることが確認できた。今後もこうした成果を継続的に高めていくために、教育内容と学習環境のさらなる充実が重要である。



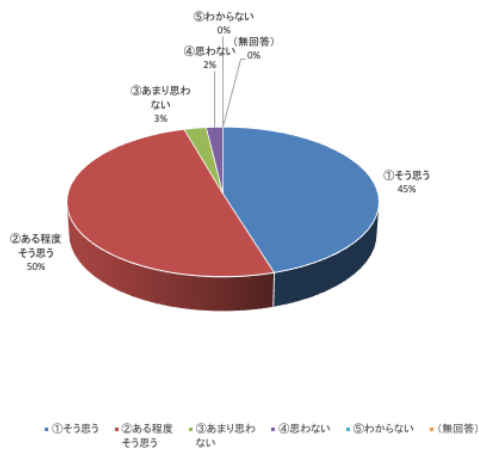
2 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。



3 社会で必要となる教養や専門知識など身に付けることができたとと思いますか。



4. 自らが学びたいという姿勢、主体的に学ぶ力は身についたと思いますか。また、卒業後も、自ら学ぶことのできる力が身についたと思いますか。

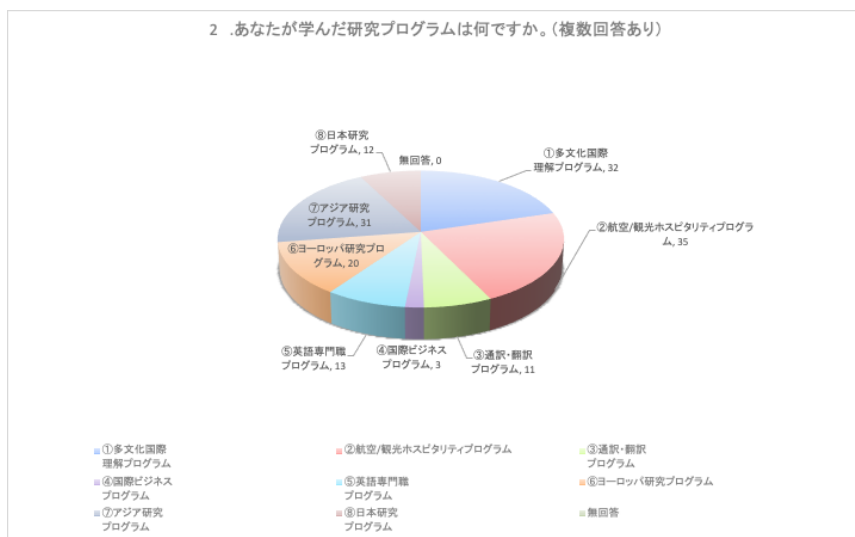


II. 専門プログラムの選択傾向

研究プログラムに関する結果を見ると、最も多かったのは「地域／観光ホスピタリティプログラム」で、35名が選択していた。観光や地域振興への関心の高さがうかがえる。次いで「多文化国際理解プログラム」(32名)、「アジア研究プログラム」(31名)が続き、国際的な視点から文化や社会を学ぶプログラムが多くの学生に選ばれていた。「ヨーロッパ研究プログラム」も20名と一定の関心を集めている。

また、「日本研究プログラム」(12名)、「英語専門職プログラム」(13名)、「通訳・翻訳プログラム」(11名)など、特定分野に特化したプログラムの履修者も少なくない。一方で、「国際ビジネスプログラム」は3名にとどまり、実務や経済分野への関心は相対的に低かったといえる。無回答はなく、全員が何らかのプログラムを選択していた点から、調査への協力姿勢も確認できた。

以上の結果から、多くの学生が国際理解や文化交流に関心を持ち、社会との関わりを重視する傾向が見られる。今後の教育プログラムの設計や学生支援の方針において、これらの傾向を踏まえることが重要である。



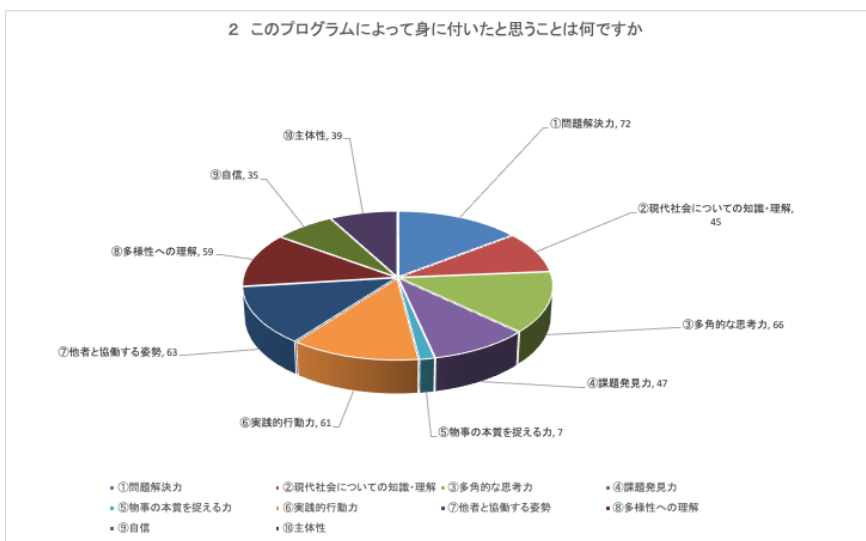
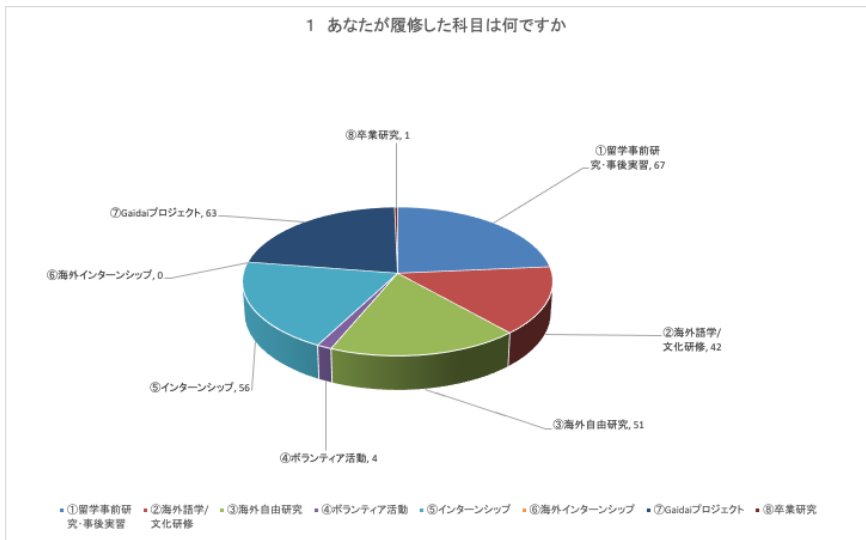
III. Gaidai プログラムについて

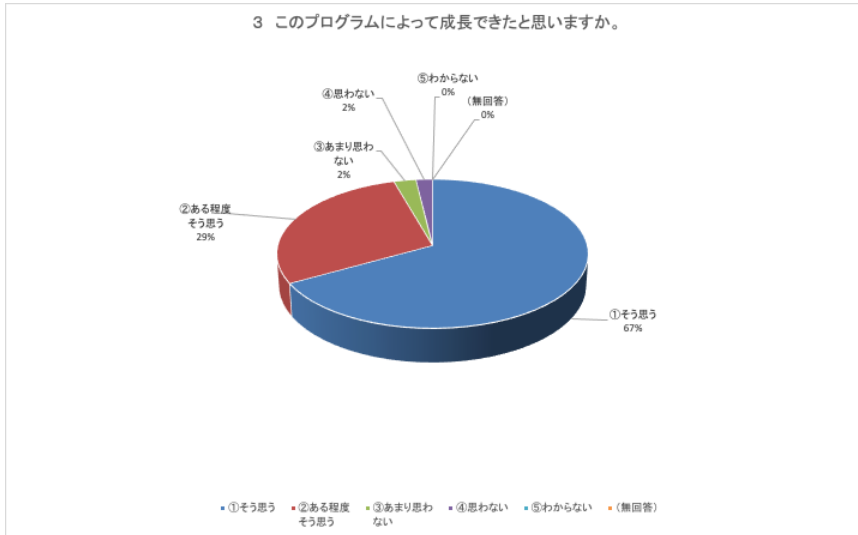
Gaidai プログラムとは、本学におけるハイ・インパクト・プラクティス（高効果型教育実践）として位置づけられる実践的な教育プログラムである。学生が主体的に学び、社会や国際社会との接点を持ちながら成長することを目的としており、以下の科目を主な構成要素としている：海外留学事前研究・事後実習、海外語学・文化研修、海外自由研究、ボランティア活動、インターンシップ、海外インターンシップ、Gaidai プロジェクト、卒業研究。これらの科目を通して、学生は知識の習得にとどまらず、現場での実践力や課題解決力、多様な価値観への理解力を育むことができる。

アンケートの回答を分析した結果、多くの学生が実践的・体験型の科目を積極的に履修していることが明らかとなった。特に「海外留学事前研究・事後実習」や「Gaidaiプロジェクト」、「インターンシップ」などへの参加が多く、理論に加えて実社会と関わる機会を重視する傾向が見て取れる。

また、これらのプログラムを通じて、学生が身につけたと感じている力としては、「問題解決力」や「多角的な思考力」、「他者と協働する姿勢」、「実践的行動力」などが上位に挙げられている。これらはいずれも、変化の激しい現代社会において求められる実践的スキルであり、本学の教育がその育成に一定の成果を上げていることを示している。一方で、「物事の本質を捉える力」など抽象的・本質的な思考に関わる項目はやや低調であり、今後の教育内容において補完が望まれる部分でもある。

さらに、プログラムによる成長実感については、96%の学生が肯定的に回答しており、教育プログラムが学生の人間的・社会的成長に大きく貢献していることが裏付けられた。以上の結果から、本学の体験型教育は概ね高い成果を上げており、今後も学生の主体性と実践力を伸ばすカリキュラムの維持・発展が求められる。



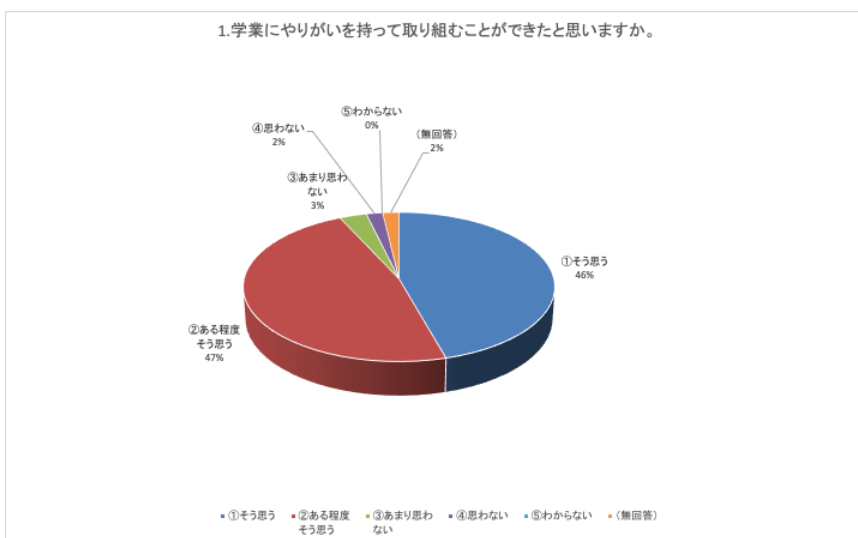


IV. 学生生活・交流機会に関する満足度

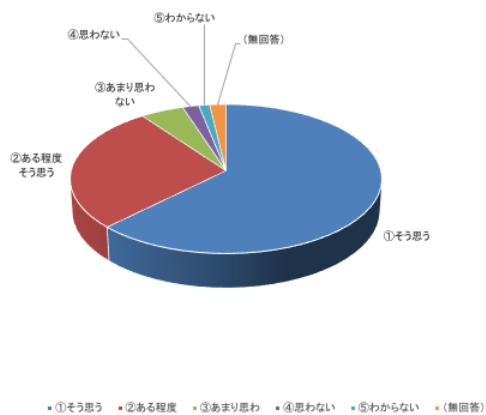
学生の多くが学業に対してやりがいを感じ、主体的に取り組んでいたことが明らかとなった。93%の学生が学業に肯定的な評価を示しており、教育内容や学びの環境が一定の効果を上げていると評価できる。また、学生生活全体の充実度についても高く、学業以外の活動を通じた成長や満足感が広く共有されていたことがうかがえる。

一方で、「教職員との接点」や「国際交流」に関しては評価が分かれた。教職員との交流については、肯定的な回答が多数を占めるものの、約4分の1の学生が十分な機会がなかったと感じており、今後は学生と教職員がより密接に関わるための仕組みづくりが課題といえる。また、国際交流についても、機会を得られた学生とそうでない学生との間に差が見られ、交流の機会やアクセスの平等性の確保が求められる。

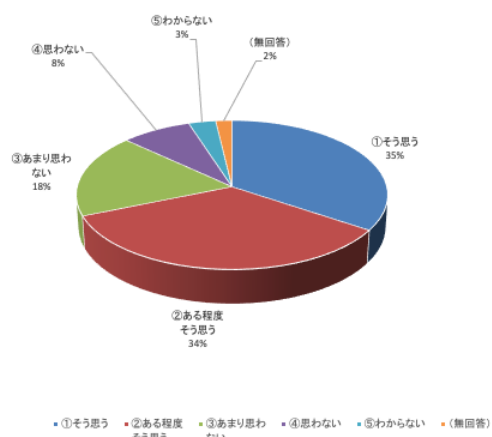
全体として、本学での学びと生活は多くの学生にとって有意義なものであったが、今後はすべての学生が等しく学びと成長の機会を得られるよう、学内外の環境整備と支援体制の充実が重要である。



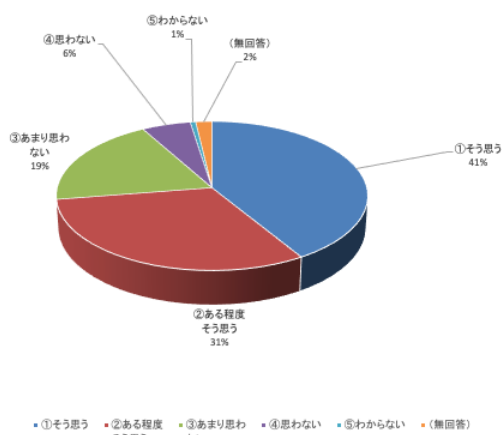
2. 自分の学生生活(学業以外)は充実していたと思いますか。



3. 授業内外、課外活動などで教職員との接点を持つ機会があったと思いますか。



4. 在学中の国際交流はできましたか。

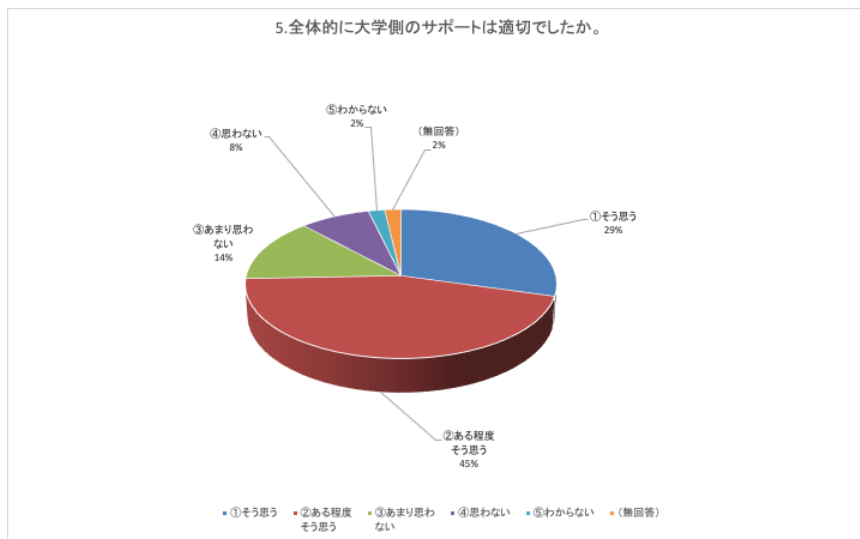


V. 大学のサポート体制に対する学生の認識

大学側のサポートについての総合的な満足度を問う設問(「適切でしたか」)に対して、「そう思う」が29%、「ある程度そう思う」が45%で、合わせて74%の学生が大学のサポートに対して肯定的な評価をしている。このことから、多くの学生が大学側から一定の支援を受けられていたと感じていたことがわかる。

一方で、「あまり思わない」(14%)や「思わない」(8%)と回答した学生も2割を超えており、一定数の学生がサポートに対して不満や不足を感じていたことも明らかである。「わからない」や「無回答」もわずかに存在しているが、その割合は比較的少ない。

全体としては概ね良好な評価であるものの、すべての学生にとって満足のいくサポートが提供されていたとは言い切れず、個別のニーズや状況に応じた支援のあり方について、今後さらなる改善の余地があるといえる。



VI. 自由記述回答から

自由記述の内容から、多くの学生が大学生活に対して肯定的な評価を持っており、「楽しかった」「充実していた」といった言葉が多数見られた。特に、国際交流や留学、語学力の向上に関する満足感が広く共有されており、本学の特色ある教育活動が学生の成長や達成感に大きく寄与していたことがうかがえる。

一方で、入学当初にコロナ禍の影響を受けた世代であることから、「思い描いていた大学生活を送れなかった」「オンライン授業で孤独を感じた」といった声も少なくなかった。ただし、そのような状況下でも「留学が再開されてよかった」「最後には楽しく終えられた」といったポジティブな転換が語られており、柔軟に環境に適応しようとする学生の姿勢が見て取れる。

また、学内の支援体制についてはおおむね感謝の声が多く寄せられた一方で、一部の職員対応への不満や教室内の学習環境に関する改善要望も見られた。これらは今後の支援体制やキャンパス運営を見直す上での重要な示唆である。

最後に、多くの学生が大学での経験を「成長」「挑戦」「人との出会い」と結びつけて記しており、語学力の習得にとどまらず、人間的な成長や価値観の変化を実感した4年間であったことが強く印象づけられる結果となった。

総 括

2024年3月卒業者の約85%にあたる157名を対象とした卒業アンケートの結果から、多くの学生が大学生活に満足し、語学力や国際交流、主体的に学ぶ姿勢を身につけたと実感していることが明らかとなった。特に留学や多文化交流への関心が高く、充実した学びの機会が提供されていた一方で、コロナ禍による制限への言及も多く見られた。また、大学の支援体制に対しては概ね肯定的な評価が得られていたが、一部には改善を求める声もあった。今後は学生の多様なニーズに応える環境整備が求められる。

以 上